	入院での治療が一段落したこともあって、退院の話が出る。			⑤歩けるようになってから退院したいという思いがあった。		↑	1			1		
	妹より、本人の退院後の生活に対する相談が支援センターに入る。本人は後日知る。				⑥本人の意思確認が不十分のまま、妹より支援センターに連絡が入る。	—						
	住宅改修のプランが進む。			⑦自分の「歩けるようになりたい」という思いを無視する形での住宅改修の話に納得がいかなかった。	⑦本人の意思確認が不十分で、妹主導により退院後の話が進む。	↑		1			1	
	今の状態でも家で生活ができるための住宅改修であり、本人の状況改善を否定するものではないということに、納得・了承する。		⑧妹・支援センター・医師との話し合いを重ね、誤解を解く。 ⑨今後は本人主体で進めていくことを再確認する。 ⑩あくまでも現時点で必要な住宅改修であるということを了承する。	⑧在宅生活に向けての意欲が出る。 ⑨在宅生活に向けての意欲が出る。 ⑩在宅生活に向けての意欲が出る。		↑	1		1	1		
59 歳	住宅改修も終了し、在宅生活が始まる。 車いすでの生活	⑪地域性もあり、外出を極力避けるようになり、家の中での生活が多くなる。		⑪歩きたいという思いは非常に強くあり、車イスという今の状況を受け入れることができない。「歩けなくなってしまったので情けない」という思いがあった。	⑪本人が生活していた地域の地域性が外出回数の減少につながった。	↓						

	リハビリへの通院支援やデイサービスの利用を通じて支援者・当事者との交流が始まる。	⑫知人から見られることが気になる。	⑫支援者や、障害のある方との交流が始まる。	⑫知り合いの人に見られたくないという思いが強かった。		—					
	ピアサロンや自立生活教室への参加する。 他者との関わりが増えてきた。 外出などにも積極的になる。		⑬障害があっても地域で立派に生活をされている方々との関わり合いを持つこととなった。	⑬リハビリによって歩きたいという思いは変わらないが、自立生活をしている他者との関わりを通じて今の状況でも主体的に生活をしていきたいという思いが生まれる。		↑	1		1	1	1	
60歳	排便・排尿のコントロールの難しさから腸閉塞になり、入院を余儀なくされる。（退院まで予想以上に時間がかかってしまった。支援センターや、ピアサロンでの友人等のお見舞いには、快く応じてくれる。）	⑭入院を余儀なくされる。		⑭これまでの前向きに行動していた気持ちが、入院によって消極的に戻ってしまう。	⑭身体状況が悪化した。	↓					
	退院し、在宅生活に戻る。	⑮腸閉塞になってしまったことで、排便・排尿のコントロールが難しくなった。		⑮外出や社会参加への意欲が低下する。	⑮身体機能が低下した。	↓					
	家で無茶なリハビリを行う。	⑯家での無茶なリハビリが続く。		⑯歩けるようなりたいという思いが非常に強くなった。		↑	1			1	

	支援センターによる定期的な訪問を通して、以前のようなリハビリや活動への参加への勧誘を受けるが、活動への参加はしない。（支援センターや、友人等の訪問には快く応じてくれるていた。）			⑰トイレを理由になかなか前向きにはなれない。		↓						
	排便・排尿をコントロールすることが徐々にできるようになる。		⑱身体状況が改善し始めた。	⑱以前のような意欲が少しずつ出始めている。		↑	1			1		
							5	1	2	5	2	

これからの人生において、再度パワレス状態が訪れるとすれば、予想される出来事は何か	今回の腸閉塞の出来事から、体調の変化等によって考えが消極的になってしまうことが予想される。
自分が幸せになっていくために、どのような力を付けていきたいと考えていますか。	障害が全く無くならなくても、リハビリによって歩けるようになりたい。

調査者所見

・ウィルス性の病気による障害なので、交通事故等とは異なり、なぜ自分に障害を持ってしまったのかということがはっきりしないこともあり、障害の受容に時間がかかっている。
・障害受容のプロセスの中にある状態で、「歩きたい」という思いも非常に強いので、その葛藤から体調を崩してしまう可能性が強い。
・神経系からの下肢障害なので、リハビリによる改善があるかもしれないという情報を頼りに「歩きたい」という思いが非常に強くある。医師もその可能性は否定できないということなので、障害が完全に固定されたかどうかが曖昧になっていることもあり、車イスでの生活のまま、前向きに物事を考えていくという気持ちには本人も慣れていない。
・これからの関わりあいの中で、時間をかけながら少しずつ障害に対する受容についての支援を継続して行っていきたい。

事例概要と分析

本事例は、人生の働き盛りを経て、老後を迎えようとした矢先に疾病により障害を持つに至ったケースである。配偶者がなく、キーパーソンは妹である。この妹が病院や相談支援センターと調整に入り、退院や一人暮らしの条件整備などを行ったが、本人の意向を確認することなく行ったことから、本人に不満が生じていた。その後、妹や関係者が本人の意向を確認しながら支援を行い、一人暮らしを始めるが、突然歩けなくなったことを受容するにはまだ時間を必要としており、さらに医師からも障害告知が不十分で、まだ歩くことへの願望が強い状況が続いている。

ややもすると、歩くことにとらわれてしまい、生活リズムをくずしそうになるが、本人の意思を尊重しながら、妹と相談支援員のサポートが続いている。障害に起因した、膀胱直腸障害により、排便・排尿コントロールが不十分であったが、そのため腸閉塞を患うという新たなパワレス状況を招いた。

自立意欲が一時期に減退するが、支援センターの継続的な支援と、排便・排尿コントロールが徐々にできるようになってきたことにより、少しずつ前向きな姿勢を取り戻してきている。しかし、まだ歩けるようになりたいという気持ちは根強く、障害受容には今後も支援を必要としている事例である。

1. パワレス・エンパワメントエピソードの件数

・ 調査者が指摘したエピソードは14件である。そのうち、
  ① パワレスになったと判断したエピソードは5件、
  ② エンパワメントしたと判断した場面は6件、
  ③ パワレスになった側面とエンパワメントである側面を同時に含むと判断したエピソードは0件
  ④ 各々に影響を及ぼしたと思われるエピソードは3件、

2. パワレス状況

・ 最初の発病と、腸閉塞を発症した件と、そのため入院した後に退院して自宅に戻り、生活上の課題を抱えた2件に分けられる。
・ 身体的に避けがたい状況と新たな生活に望む基点での力の低い状態。

3. エンパワメント状況

・ モデル別に見ると、住宅改修時点がⅡ型となる以外は、すべてⅠ型であり、本人の意図からのものであることが分かる。
・ またそのうちⅢ型との混合タイプが見られるが、
  ① ひとつは妹主導で動いた住宅改修に対して本人が異議を唱えその調整に支援センターが関与したとき
  ② 在宅生活の中で孤立しがちな本人にピアサロンなど地域の活動を促したときである。
・ 混合タイプでは、支援者が寄り添いながら本人の意志に基づき今後の生活を見据えるときのアドバイザーとなっていることが読み取れる。

4. エンパワメントタイプの変化

・ 発症による混乱期から、リハビリを受けていた時期では、本人としてどのように今後を考えるかまとまっていないこともあり、他者主導のⅡ型が1回見られるが、この時点では、妹との関係が障害をもつ兄と健常の妹に見られる逆転状況であった。
・ しかし、社会経験をつんだ中途障害者であったこともあり、その後は本人が主体となって生活していることが、その後のエピソードで確認でき、Ⅰ型が中心となっている。
・ ただし、「歩けるようになりたい」という願望が強く、障害受容がまだ不十分なことから、必要なたびに支援センターが関与するⅢ型との混合が見られると思われる。
・ 自立生活を始めた日が浅く、今後もⅠ型中心で必要に応じ、Ⅲ型との混合タイプのエピソードが出現すると考えられる。

5. まとめ

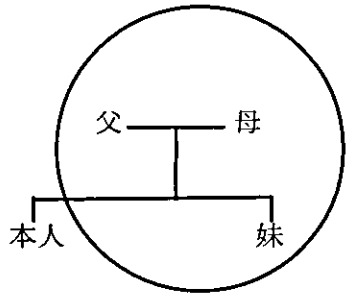
この事例は、58歳の発病から60歳の現時点までの比較的に短期間の事例であり、目覚しいほどのエンパワメントを果たしているものではない。パワレスとそれを克服するエンパワメントが交互に現れている。障害の受け止め方に大きな変化がなく、しばらくは何か身体的なあるいは環境的な変化によりパワレスな状況と、その都度エンパワメントを繰り返すと推測される。 しかし、発症後間のない混乱期は、他者主導であった。本人がそれに異議を唱えてからは、本人の意思を中心とした流れになっており、この関係はエンパワメントプロセスとし

てみると、前進の方向であるといえる。

II型は、生活する地域の社会資源の質量の多寡と、その情報流通体制により変化すると考えられる。そのため本事例でII型が少ない状況から、佐光さんの地域に資源が少ないか、情報が本人まで届きにくい状況にあるのではと推測される。

○ エンパワメント事例3

氏名: 高倉 るり子	年齢: 44歳	家族構成
障害名:脳性まひによる四肢及び体幹機能障害		
手帳・等級:1種1級		
居住地住所:〒 京都市○○区□□町 電話番号: 075−396−0010		
住環境(バリアフリー関係) : バス、トイレは改造済 床面はフラット		



暦年齢	出来事(生育暦)	パワレスな状況になった事柄	エンパワメントしていく契機となった事柄			状況の変動	エンパワメントモデル			エピソードの必然性		
			分岐点	心的状況	引き戻した力		Ⅰ型 個人因子強化	Ⅱ型 環境因子強化	Ⅲ型 相互関係強化	本人の意図	他者の意図	他者の偶然
			・ある人との出会い ・研修への参加 ・両親の病気や死 ・その他	・好きな人ができた ・自立心が芽生えてきた ・その他	・両親の反対 ・社会の偏見や差別 ・その他							
14歳	【学齢期】 電動車いす体験会に参加する。自身は左利きだが右利き用しかなく(スティックの位置)それでも乗ってみたが、「自分で動けるけど何?今までよりは動けるかな」程度にしか思わなかった。	①電動車いすの操作機器が右利き用しかなかった。		①「自分で動けるけど何?今までよりは動けるかな」程度にしか思わなかった。	①電動車いすの操作機器が右利き用しかなかった。	—						
	どこかへ行くときは母親の運転で移動していた。電動車いすだと車に積めず、制限されるから要らないと思っていた。	②母親の運転で移動していた。		②電動車いすだと車に積めず、制限されるから要らない。		—						

18 歳	【卒業後①】 更生施設に入所する。											
21 歳	この頃、移動のときは、誰かに送迎をしてもらっていた。電動車いすには乗らない、自分には乗れないだろう、乗ったとしても何か生活が変わるのだろうか、と思っていた。			①電動車いすの利用に消極的であった。		—						
24 歳	施設の中で好きな人ができ、その人にバレンタインデーにチョコレートを渡したいと思い、施設職員に車いすを押してもらい施設の売店で普通のチョコレート買って、バレンタインデーに渡した。		①施設の中で好きな人ができた。	①好きな人にバレンタインデーにチョコレートを渡したいと思った。		↑	1			1		
		②バレンタインデー用チョコレートの存在を知る機会を得られてなかった。			②アドバイスをもらう機会がなかった。	↓						
	渡した人に「バレンタイン用のチョコレートじゃないの？次はバレンタイン用のにしてね」と言われた。			③来年はバレンタイン用のチョコレートを渡したいと思った。		↑	1			1		1
	電動車いすに乗れば一人でバレンタインのチョコレートが買いに行けるかもしれない、また施設職員に自分の行動を全て見られるのが恥ずかしかったがそういうこともなくなるかもと思った。	④施設職員に手動車いすを押してもらって移動していた。		④一人で買い物に行きたい。 ④一人で行けば行動を見られることもなく恥ずかしくなくなるのではと思った。		↑	1		1	1		
	施設に入所しているある人が、「電動車いすに乗ったら今まで押してもらいながら介助者と会話をしていたのが、電動車いすに乗ったら一人で移動するのでコミュニケーションが取れないのでやめま	⑤施設では手動車いすでの移動の方が楽な環境であった。	⑤電動車いすに乗ることを決めた。	⑤電動車いすに乗れば、動くことが楽しくなる。働きかけることができる。誰かが来るまで待たなくてもいい。電動車いすに乗ってて	⑤施設に入所しているある人が、電動車いすに乗ることに消極的な意見をいった。	↑	1			1		1

	す」と言っていたが、自分は電動車いすに乗ることを決めた。			も自分から話しかけに行けばいいと思った。								
	施設を退所し、実家で生活する。											
26 歳	【卒業後②】 地元で車いすの講習会を企画し、A氏に講師依頼をした。その時、「□□自立生活センター」のリーダーB氏も一緒に来て、本人が電動車いすに乗っていることから、B氏に「自立生活の勉強会に来ないか」と誘われた。		①B氏に「自立生活の勉強会に来ないか」と誘われた。			—					1	
	自立生活センターの勉強会へ参加する(週1回1年間続ける)。		②勉強会へ参加する。			↑			1	1		
	センターの企画で保津川下り、雪の温泉など、いろんなところへ行った。		③保津川下り、雪の温泉など、いろんなところへ行った。	③いろいろな所に行き、楽しかった。		↑			1	1	1	
	自宅から自立生活センターまで電車と徒歩で通う。駅からセンターまで距離はあって大変だったが、頑張って通った。	④公共交通機関が利用できない。	④電動車いすで通う。	④バスに乗れないので、電動車いすで通った。		↑	1			1		
	自立生活センターのスタッフC氏より、自立生活センターの事務所の手伝いをしないかと誘われ、手伝いをする。		⑤C氏より、自立生活センターの事務所の手伝いに誘われる。			↑			1	1	1	
28 歳	実家を出て、自立生活センタ		⑥実家を出て共同生活を始める。			↑	1			1		

	一の利用者D氏と共に家を借り、そこで2年半共同生活をする。その間、自立生活センターのボランティアスタッフE氏、F氏、G氏がボランティアで地域生活を送るための協力をしてくれた。		⑦ボランティアが地域生活を送るための協力をしてくれた。			↑		1		1		
	アルメニアの震災が起こり、社会的弱者である障害をもつ人が他の人のための役にたつことができるということを社会に伝えるために自立生活センターが募金活動を行い、自分も参加した。		⑧その活動が認められ、表彰される。	⑧自分でも役に立つことがあると思いうれしかった。		↑			1	1	1	1
	近所の人から、障害者が火を使うのは危ないということやゴミ出しの方法などに関して忠告されるなど、近所付き合いがうまくいかない。	⑨近所の人から、火の使用やゴミ出しなどに関して忠告される。		⑨苦労はするが、このまま地域での生活を続けたい。	⑨障害をもつ人の地域生活が社会に受け入れられていない状況がある。	↓						
31歳	【卒業後③】 契約期限が来て借家を出ることになる。親に「住むところが無い」と泣きついて、家を探してもらい、地域を変え引き続き共同生活を始める。行政の単費事業である「地域自立生活ホーム○○」の申請登録する。その申請にはB氏、C氏をはじめとする自立生活センターが協力した。		①借家を出る。		①契約期限が切れた。	↓						
			②親に家を探してもらい、住む。	②親なら「行くところがない」泣きつけば探してくれると思った。		↑	1		1	1	1	
			③申請にはB氏、C氏をはじめとする自立生活センターが協力した。			↑			1		1	
	自立生活センターでは毎日新しい体験ができ、楽しかった。			④自立生活センターでは新しい体験が出来き、楽しい。		↑	1			1		

	一人でトイレが出来ず、介助者(ボランティア)が休みのときは自分も休んでいた。それでも事務所に行きたくなり、一人で出来るよう練習をしたら出来るようになった。	⑤トイレ介助が必要でった。	⑤一人で出来るようになった。	⑤事務所にいきたい。 ⑤うまくいってすごくうれしかった。	⑤介助者(ボランティア)が休みのときは自分も休んでいた。	↑	1			1		
	事務所への道順の電話での案内を、見よう見まねでしてうまくいった。	⑥道案内ができない。	⑥道案内がうまくいった。	⑥役に立ちたい。 ⑥すごくうれしかった。	⑥事務所付近の地理があまりわからない。	↑	1			1		
	車の助手席に乗る練習をしたらできた。		⑦車の助手席に乗れた。	⑦介助なしで車に乗れるようになりたい。 ⑦うまくいってすごくうれしかった。		↑	1			1		
	自立生活センターのリーダーB氏には怒られたが、自分で出来ることが増え、楽しかった。	⑧B氏に怒られた。		⑧怒られはしたが、自分で出来ることが増え、うれしい。		—						
33 歳	地域自立生活ホームを改造する。		⑨住宅環境を改善した。			↑			1	1	1	
37 歳	障害者生活支援センター「○○」(市町村障害者生活支援事業)に、ピアカウンセラーとして勤務する。		⑩常勤の相談員として正職に就く。			↑			1	1	1	
40 歳	○○市障害者生活支援センター(市町村障害者生活支援事業)に、相談員及びピアカウンセラーとして勤務する。		⑪地元で常勤の相談員として正職に就く。			↑			1	1	1	
41 歳	地域自立生活ホームの同居人が自殺する。当日の朝に気配(足音)を感じていた。			⑫相談を聞いたりして深く関わっていたのにこのような結果になり、自信をな	⑫半年間ショック状態が続いた。	↓						

				くした。								
43 歳	地域自立生活ホームの利用者が無くなり、補助金の打ち切りとともに地域自立生活ホームを終了する。その後、持ち家としてそのまま一人暮らしをする。今は電動車いすに乗ることによって、自分で行動できるから、依頼されたことは何でも引き受けている。			⑬電動に乗っていなかったらもっと受身になっていたかもしれない。		↑	1			1		
							12	1	10	20	9	3

これからの人生において、再度パワレス状態が訪れるとすれば、予想される出来事は何か	・同居人の自殺があったが、同じようなことがあるとパワレスになるかもしれない。 ・実家に戻ったらどこにも出なくなるかもしれない。自分で何もしなくても、親が全て面倒を見てくれるので生活していける。また暇やなあ、と思う日々が続きそう。
自分が幸せになっていくために、どのような力を付けていきたいと考えていますか。	・今が幸せ。今の生活で満足している。強いて言うなら仕事での力が欲しい。

調査者所見

・電動車いすに乗り、活動範囲が広がったことがエンパワメントされた分岐点ではないだろうか。
・以前は自立生活センター等で精力的に活動していたが、生活支援センターへ勤めるようになり、自立生活センターで活動することがほとんど無くなっている。
・出勤時の送迎を父親がしていることや、ホームヘルパーへの対応等に、パワレスな状況が見られた。
・一見、現在もエンパワメントされているように見えるが、パワレスな状況になりかけているのではないだろうか。

事例概要と分析

本事例は、「脳性マヒによる四肢及び体幹機能障害」により、車いすや電動車いすを利用しており、養護学校を卒業した後に、施設入所、在宅、自立生活センターとの出会い、障害

者運動、共同生活、失恋、就職等を経験され、波乱万丈の半生記を過ごされた女性である。「本人」に知的障害はなく、聞き取り調査を実施する上では何の問題点も見出せなかった。調査員は、彼女が暮らしているグループホーム(現在は一人しか住んでいない)へ2回に分けて訪問し、多くの時間を使用して心理的な深い面も聞くことができた。この事例を見ていくと、障害をもつ者としてパワレスになった部分、女性としてパワレスになった部分、そして、障害をもつ女性としてパワレスになった部分という3つのパワレス要因が複雑に絡み合う状況が理解できる。

本事例においては、「電動車いす」という自力で移動できるツールを手に入れたことにより、身体的や空間的に開放されることも大きなメリットではあったが、移動の制限が軽減されたことにより、精神・心理的にエンパワーされたことが人生の中での大きなイベントとなっていた。さらに、彼女には一般社会でのルールを学んでこられなかったという自覚もあり、社会との接点を模索し続けている。障害をもつ者として多くの制限を受ける生き方を余儀なくされてきた彼女は、障害者運動のリーダーと出会うことにより、人権意識に目覚め、自立生活センターの中心人物となり、障害者運動の女性リーダーとして、ピアカウンセラーとして、他の障害をもつ女性たちにも大きな影響力を持つ存在と成長していくのが分かる。人生の目標となる人物との出会いや障害者運動との接触が、大きな分岐点となっている。

1. パワレス・エンパワメントエピソードの件数

研究員が指摘したエピソードの総数は30件であり、その内訳は次の通りである。

①パワレスになったと判断したエピソードは、4件

②エンパワメントであると判断したエピソードは、21件

③パワレスになった側面とエンパワメントである側面を同時に含むと判断したエピソードは、0件

④分岐点ではあるが、パワレスともエンパワメントとも判断できないエピソードは、5件

2. パワレス状況

・両親を初めとする周囲の人たちから暖かく見守られ育てられてきたので、パワレスになる状況にはならなかった学齢期であったが、更生施設に入って、好きな男性にバレンタインデーのチョコレートを贈りたいと考えたが、専用のものがあることを知らずに、普通のものを贈ってしまい、その人から指摘を受けた。誰も教えてくれなかった。

・28歳のときに、共同生活を始めたが、障害をもつ者だけの生活だったので、近所の人たちから火の使用やゴミ出しに関して度重なる苦情を受け、地域生活の苦しさや難しさを痛感することになる。

・契約期限がきたことにより、借家を出て行かなければならなくなった。しかし、障害をもつ人たちと賃貸契約してくれる家主が少なく、精神的に落ち込んでしまい、本意ではなかったが、両親に協力を依頼し、依存してしまったことがパワレスと考えられる。

・地域自立生活ホームでの生活を続けていく中で、一人の男性が部屋で自殺をした。その日の朝に足音を聞いており、またそれまで相談に乗っていながら止められなかったのか、という気持ちと、自分自身をオーバーラップさせた複雑な精神状態でパワレス状況になっていった。

3. エンパワメント状況

・学齢期を終えるまでは、変化の少ない生活を与えられてきたということもあり、最初にエンパワメント状況が見られるのは、更生施設に入って、好きになる男性と出会うことが生きる喜びとなっていった。

・更生施設の中で、25歳のときに、電動車いすを使用することを決めた。自力で軽快に移動できるツールは、彼女に積極性というパワーを与えたと考えられる。

・最も大きなエンパワメント状況は、障害者運動のリーダーとの出会いであり、自立生活センターの活動であった。その中で、ピアカウンセラーという仕事は、彼女の人生にとって大きな力となった。

・このような障害者運動との出会いが、28歳のときに、実家から出ることを決意させ、共同生活ではあるが、地域社会での生活を現実とした。

・31歳のときに、借家から出なければならなくなり、両親を頼りにして、共同生活が可能な住居を見つけ出してもらった。パワレスな状況が継続すると考えたが、行政の単費事業である地域自立生活ホームを申請・登録して、エンパワメント状況に変化させている。
・共同生活をしている代表者的な位置にあり、リーダーとしての自覚が強くなることにより、確実にエンパワメントしていることが分かる。
・40歳になったときに、地元の自立生活支援センターから「常勤のピアカウンセラー」として雇用されることになり、自分が求められる人間になったという感覚からエンパワメントした。

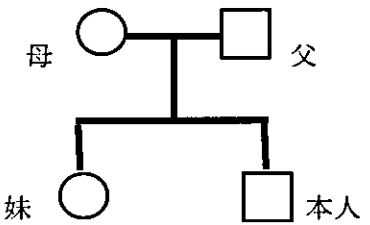
4. エンパワメントタイプの変化
・すべてのモデルについて、24歳以降に急激に変化していることが読み取ることができる。
・生まれながらにして障害をもった人たちの特徴と言えるかも知れないが、個人のストレングスを大きくしていくⅠ型が多く、本人の意図でエンパワメントしてきたと考えられる。
・Ⅲ型は、施設に入所していたときに、集中しており、施設という枠内において対応されたイベントが大半であった。
・この報告書で取り上げた他の事例と比較してみても、環境因子に関するⅡ型が極端に少な過ぎるのではないだろうか。環境的な事柄に変化が起きる時代ではなかったのか、環境に対する意識が低かったのかは、不明である。

5. まとめ
本事例は、生まれながらにして障害をもった人たちがエンパワメントする過程の典型例として提示することができると考えている。学齢期を終え、入所施設を経験し、社会に出て行くことができずに在宅生活を余儀なくされ、社会における様々な事柄に対する怒りや憤りが蓄積されたエネルギーとなって、障害者運動という起爆剤によって、いっきに燃え上がるのである。この事例でも、年齢が高くなるにつれて、両親やホームヘルパーに対する精神的依存度も高まり、パワレス状況が見え隠れし始めている。身体機能面への意識とエンパワメントにも、大きな関係性があるのかも知れないと考えさされた事例であった。

○ エンパワメント事例4

氏名: 坊村 邦太郎	年齢: 32 歳
障害名:脳性麻痺による四肢体幹機能障害	
手帳・等級:身体障害者手帳 1種2級	
居住地住所:〒 京都市 ○○区 □□町 電話番号: 075-899-0000	
住環境(バリアフリー関係) : 特殊便器使用 浴槽に取り外しのできる手すりを設置	

家族構成



家族3人で住んでいる。
正式に離婚はまだであるが父は別居している。(離婚調停中)

暦年齢	出来事(生育暦)	パワレスな状況になった事柄	エンパワメントしていく契機となった事柄			状況の変動	エンパワメントモデル			エピソードの必然性		
			分岐点	心的状況	引き戻した力		Ⅰ型 個人因子強化	Ⅱ型 環境因子強化	Ⅲ型 相互関係強化	本人の意図	他者の意図	他者の偶然
			・ある人との出会い ・研修への参加 ・両親の病気や死 ・その他	・好きな人ができた ・自立心が芽生えてきた ・その他	・両親の反対 ・社会の偏見や差別 ・その他							
出産時	【就学前】 難産(へその緒が首に3重に巻きついていた)により脳性マヒとなり、運動機能の障害を受ける。	①身体障害をもつ。				—						
2歳	身体障害者手帳を取得する。					—						
	障害児の行く幼児施設(○○学園)に入園する。					—						
	訓練を毎日行う。					—						
6歳	【学齢期①】 ○○養護学校入学。					—						

てんかん発作が頻繁に起きたため、ほとんど自宅で療養し、病院に通うことが多かった(ひどいときは1日に2回くらい、一番ひどいときは30分続いた)。5割から7割ほど学校を休む。先生が家まで来てくれることがあった。 発作は5年生まで続き、それまで薬を飲み続ける。	①てんかん発作が頻繁に起き、5割から7割ほど学校を休む。		①学校にもっと行きたいと思う。		↓						
クラスメイト(股関節の手術のために一時入院していた子)と喧嘩に明け暮れる毎日だった。		②学校に行った日は、ほとんど喧嘩をしていた。	②学校に行くことは好きであった。クラスのリーダーは自分であるとアピールしたかった。		—						
学校では毎日、リハビリ訓練を行なう。 毎日の訓練の中で、障害について考え始める。 自分の障害は風邪のように薬を飲んだら治るものだと思っていた。			③毎日の訓練の中で、障害について考え始める。		↑	1			1		
担任の先生から何事にも母親に依存し過ぎるので、距離を置くようにアドバイスを受ける。精神的分離を目的に小児病棟に一年間入院した。	④入院する。	④担任から入院を勧められ、入院することを決める。			—						
琵琶湖のキャンプに釣りをしにいった。歩行器を使い、妹と2人でバスに乗った。		⑤妹と二人でバスに乗る。	⑤自分に自信がついた。		↑	1			1	1	

8歳	山に登る。障害のない人が20分かけて登るところを、よつんばいで3時間かけて登った。		⑥よつんばいで登山する。	⑥達成感があった。		↑	1			1		
	周りの子供たちは野球をしていたが、自分はできなかった。	⑦障害をもっているため野球ができなかった。		⑦自分も野球をしたかった。歩くことができたらいいのにとも思った。	⑦間を取り持ってくれる人がいなかった。	↓						
	訓練を続けていたが治るものではなく、訓練は今の機能を維持するだけのものであると分かった。障害は消えないものだと分かった。家では「死にたい」と母や妹に言っていた。包丁を振り回し、障子を破り、ガラスを割ることもあった。	⑧学校では自分の辛い心境を話せる人がいなかった。	⑧障害は消えないものだと分かった。	⑧精神的に落ち込んだ。生きていてもしかたないと思った。	⑧家族以外に自分の気持ちを受け止めてもらえる対象がなかった。	↓						
	電話で担任の先生に「死にたい」と言って、家に来て話を聞いてもらう。それ以降は「死にたい」と言うことはなくなった。また、喧嘩以外では物を壊すこともなくなった。		⑨電話で担任に「死にたい」と言った。担任はすぐに家に来てくれ、話を聞いてくれた。	⑨「家族に迷惑を掛けていた」と考えるようになった。		↑	1		1		1	
14歳	【学齢期②】 高校入試も考えて模試を何度か受けたが、思うような結果を得ることができなかった。養護学校進学を決めた。		①養護学校へ進学することを決めた。	①学力不足を痛感した。		↑	1			1		
15歳	【学齢期③】 ○○養護学校高等部へ進学する。					—						

	入学当初はスクールバス通学であったが、高校2年生の頃から生活訓練の一環として、電車で帰るようになり、遅くまで学校に残れるようになった。		①スクールバスの運行時間が終わっても学校に残れるようになった。	①友だちと過ごせることに充実を感じた。		↑	1	1		1	1	
	課外クラブでは補欠で、試合になるとみんなを応援する役割を担った。		②応援する役割を担った。	②みんなで何かをする楽しさを感じた。		↑	1	1		1		1
	進路相談を受け、職業訓練校に行きたいと希望するが、先生から大学進学を勧められる。		③先生から大学進学を勧められた。	③職業訓練校に行きたいと希望した。	③先生からあせらずに大学進学をするように勧められた。	↑	1			1	1	
17歳	2 年間勉強したいと母に伝え、進学を希望し自宅で勉強した。		④進学を希望した。	④進学に向けて勉強を頑張る気持ちになった。		↑	1			1		
	2 年間で成果が上がらず、進学をあきらめ、職業訓練に行くことを決める。	⑤進学をあきらめる。		⑤再度、職業訓練校に行くことを考える。		↓						
18歳	【卒業後①】 愛知県の身体障害者職業能力訓練校(内容は一般事務)の寮に1年間入った。					—						
～19歳	訓練校を終えて京都に帰り、職業安定所に通ったが勤め先が見つからなかった。	①就職先が決まらなかった。	①就職先がなかった。	①「能力があるのに行き先がないのだなぁ。手が自由にきけば職があるのにしゃあないな。これが自分なのだな」と思った。	①就職先がなかった。	↓						
	福祉施設の見学などに行き始め、授産施設に行くことを決める。		②授産施設に通うことを決める。			↑	1		1	1		

22歳	【卒業後②】 ○○授産施設に通う。タオル折りや菓子のシール貼りをした。	①訓練校での勉強を生かせなかった。		①仕事があって良かったと思った。	①訓練校の内容を生かす仕事が授産施設にはなかった。	↓						
	授産施設の職員から指示を受けながら、製品の販売を行なった。		②製品の販売を行なった。	②仕事内容のレベルが上がり自信に繋がった。		↑	1			1	1	
	販売を任されるようになり、知的障害の人を連れて、販売をするようになった。		③販売を任されるようになった。	③責任感もつき、さらに自信に繋がった。		↑	1			1	1	
24歳	一人暮らしをしたいと言うと、母から反対を受けた。			①一人暮らしを考える。	①母から「まだ早い。28歳くらいからでいいのではないか。」と言われる。	↓						
	親に内緒で不動産屋に電話をしたが、障害があるので断られた。	②障害を理由に不動産やから斡旋を断られる。	②親に内緒で不動産屋に電話をする。		②障害を理由に不動産やから斡旋を断られる。	↓						
	理解のある不動産屋と出会い、貧素なマンションで一人暮らしを始める。		③理解のある不動産屋と出会う。	③一人暮らしという夢を1つ叶えたと思った。		↑	1	1		1		1
	一人暮らしといっても、母や妹が合鍵を持ち、ご飯を持ってきてくれた。朝は授産施設まで送ってくれた。	④家族が合鍵を持ち、食事と送迎を担当した。			④社会資源を利用できなかった。	↓						
	初めて福祉サービスを利用する。福祉電話をつけたりした。		⑤初めて福祉サービスを利用する。			↑	1	1		1		1
	【卒業後②】											

26 歳	「○○の旅(○○クラブの15周年記念で韓国へ)」に参加。同じ脳性マヒの障害をもつA先生と出会い、○○大学で勉強することを勧められる。		①A先生と出会い○○大学で勉強することを勧められる。	①○○大学に行きたいと思った。		↑	1	1				1
27 歳	○○大学に入学し、生徒と顔見知りになる。障害をもった人も多く来ていることを知った。レポート作成に苦労した。スクーリングのときにノートテイクを利用した。		②○○大学の生徒と顔見知りになり、他にも障害をもった人が多いと知った。			↑	1	1		1		1
	ボランティアを利用するときは、今まで親にセッティングしてもらっていたが、自分でボランティア協会にボランティアを依頼するようになった。		③自分でボランティアを依頼するようになった。			↑	1			1		
28 歳	【卒業後③】 ピアカウンセラー養成講座に参加する。養成講座で仲間が増えた。養成講座終了後も、講座を受けた人たちと定期的に集まっている。		①養成講座終了後も、講座を受けた人たちと定期的に集まる。			↑	1	1		1		1
	初めて友人に風俗へ連れて行ってもらった。		②風俗へ連れて行ってもらった。			↑	1			1		1
	風俗にはまり、そこで仲良くなった女性と月に1度、映画を観るなどして遊ぶようになった。		③風俗で仲良くなった女性と月に1度の割合で遊ぶようになった。			↑	1			1		1
	女性との交際が母と妹に見つかり(携帯の待ち受け画面に写真を載せていたので)反対される。		④女性との交際を家族から反対される。		④女性との交際を家族から反対される。	↓						

	高校の恩師の誘いで○○当事者グループ熊本大会に参加。この大会をきっかけに、○○当事者グループの知的障害の人とも親交を深めている。話し合う会を月に1回ほど行なっている。調理実習、加茂川ハイキングに意欲的に参加するようになった。		⑤○○当事者グループの知的障害の人とも親交を深めている。話し合う会を月に1回ほど行なっている。	⑤ゆくゆくは京都でも全国大会ができたらいいなと個人的に考えている。		↑	1		1	1	1	
29歳	【卒業後④】 「A先生と行くグアムツアー」に参加する。先生から「君はまだまだ可能性がある。動いていかなければいけないよ。」と言われた。		①A先生より「君はまだまだ可能性がある」と言われ頑張ろうと思った。	①A先生は自分より障害が重いのに、周りに人がたくさん集まることを羨ましく感じた。		↑		1	1		1	
	A先生の勧めで支援センター○○にも顔を出すようになり、支援センターの相談員B氏に福祉用具購入等、生活相談のアドバイスを受ける。		②支援センター○○に行き、社会資源や生活について相談する。	②アドバイスを受けたことによって、自分をより知ることができた。		↑		1	1		1	
～30歳	支援センターが行っている学習支援に参加する。メンバー同士でプログラムを組んだり、企画を出したりした。教室を借りたり議事録作成などのサポートは、支援センターの職員にしてもらった。		③学習支援に参加する。	③メンバー同士でプログラムを組んだり、企画を出し合ったりして、仲間意識が芽生えた。		↑	1	1		1	1	
31歳	○○勉強会に参加する。市の福祉課の人も参加する会で、介護問題のことを中心に勉強している。		①勉強会に参加する。	①介護についての意識が高まった。		↑	1	1		1	1	
							23	11	5	21	11	8